

酒井 慈¹: 報告—第36回日本植生史学会談話会Megumi Sakai¹: Report—The 36th forum of Japanese Association of Historical Botany

第36回日本植生史学会談話会が2013年12月2日に「室戸岬の植生と植物」というテーマで開催された。当日は早朝に高知市内をバスで出発し、高知大学の三宅尚先生のご案内の下、午前中に金剛頂寺（西寺）の常緑広葉樹林を、昼食後に室戸岬の海岸林を見学した。天候に恵まれ、12月に関わらずとても暖かく、波も穏やかな1日であった。

最初の目的地の金剛頂寺は室戸岬から6 kmほど北西の海岸に面した丘陵地に位置する。四国八十八ヶ所霊場の札所の一つで成熟したスダジイ林が残されている（図1）。室戸岬の1月の平均気温は7.5°C、暖かさの指数はほぼ140°C・月と温暖で、亜熱帯の常緑広葉樹林と共通する種や、共通する生活形（幹生花や草本性の地上植物など）を持つ種が出現するとのことだった。今回は寺の境内で植栽の可能性はあるが、大型のシダであるオオタニワタリを見ることができた。スダジイ林内ではスダジイのほか、四

国では少ないというイスノキや、ヤマビワ、ヒロハミズバイ、蔓植物のテイカカズラや、フウトウカズラなどを見ることができた。ヒロハミズバイ、ミサオノキなどのハイノキ科やアカネ科の亜高木性、低木性の樹木は、隣接する常緑広葉樹二次林では少ないというお話を伺い、貴重な森林を見ることができたのだと感じた。

スダジイ林の林床には天然記念物に指定されているヤッコソウがスダジイのどんぐりをばらまいたように群生している光景を見ることができた（図2）。ヤッコソウはシイの根に寄生するが、その個体数には年次変動があり、スダジイのマスティングと関連性があるかもしれないとのことだった。ご案内くださった三宅先生によると林分の老齢化や台風の襲来による枝落ち、モウソウチクの侵入などで、以前から寺叢内部はかなり荒れた状態であったが、今年に入って大きな林内整備が行われたようだったとのことだった。



図1 成熟したスダジイ林。四国では少ないイスノキも生育している（撮影：箱崎真隆氏）。



図2 ヤッコソウ（上）と群生地。杭で囲まれている。



図3 矮小化した海岸林の樹木（箱崎真隆氏撮影）。

枯死した枝・幹の撤去の際、邪魔となる低木や草本も刈り取られてしまったようで、寺叢の保全状況はかえって悪化したように見受けられる。境内では比較的新しい鯨供養の碑や、自動車から降り立つお遍路さんなどを見かけ、現代でも伝統的な習慣や信仰が引き継がれているのだと感じた。

道の駅「とろむ」で豪華でおいしい魚料理をいただいた後、室戸岬へ移動した。移動中、海岸に面した平地に満開のコスモス畑があり、ピンク色の花を風にそよがせていた。陽光も強く、暦の上では12月であることを疑うほどであった。室戸岬では3つのプレートによる激しい隆起活動で、幅100 mほどの海浜に比高差150 mほどの段丘崖が迫っている。沿岸地の海岸林はウバメガシ、アコウ、トベラ、マサキなどで構成され、林床には亜熱帯性のクワズイモが自生していた。海岸林は汀線から標高約20 mまでの緩斜面に成立していたが、強風の影響ですべての樹高が5～6 mほどしかなく樹冠が剪定されたように揃っていた（図3）。一方で幅5 mほどの道路を挟んで背後に迫る段丘崖上のウバメガシ林は樹高が8～12 mであるといい、道路を挟んで風速が異なることが窺えた。地面付近でウバメガシの果実や草本の花粉を採取する参加者たちの姿に通りがかった遍路姿の方が非常に驚いていたが、筆者自身がそのような光景を当然のように感じていたことに驚くと同時にわずかな成長を嘯みしめることができた。

海浜は礫浜で、岩場を覆うようにテリハノイバラやハマゴウ、ハマナタマメ、岩陰や汀線から少し奥まった地点でシオギク、アゼトウナなどが群生している様子が観察された。シオギクはキク科の多年草で黄色い筒状花だけを持ち、四国の東部のみに分布する。元来、当地に分布していない、白い舌状花も持つノジギクを人間が持ち込んだため、シオギク（図4）とノジギクの雑種が生じ、筒状花と舌状花両方を持つキクが生まれてしまったということだった。実際



図4 シオギク（上）とアゼトウナ（下）。

に見てみるとシオギクにそっくりであるが、黄色い筒状花の周囲を白い舌状花が囲んでいる様子を見ることができた。

室戸岬は世界ジオパークに認定されている。海岸林内を通る舗装された観察道や各所の説明板が目立ったが、加えて周辺の見どころを記した地図に実際に行けるよう細かい配慮がなされており、多くの地元の関連団体が協力していることが窺えた。ありのままの環境を観光の対象にする充実した取り組みを見る事ができた。

室戸岬では四国の太平洋側特有の植生を見ることができた。しかしそれだけでなく、多様な地形や、遍路や漁にまつわる様々な文化が残されている、とても興味深い土地であると感じた。このように自然環境や文化が今日までよく保存されてきたのは、遍路行が今でも廃れずに継続されていることに関係があるのだろうかと思われた。

末筆ではございますが、わかりやすく魅力的なご説明をしてくださった三宅尚先生をはじめ関係者、参加者の皆様

に厚く御礼申し上げます。
 (〒271-8510 千葉県松戸市松戸648 千葉大学大学院園芸学研究科)